

はなにかしらと思っていたが、知らぬ間になくなった。医者もわからぬといったが、被爆者は腹痛が多いと聞いている。

私は被爆者手帳をもらうため、兵庫県庁から兵籍簿の写しを送ってもらったので、軍歴が比較的よくわかったから、対潜、対空戦の場所も、東経、北緯何度、何分までこたえられるのです。

なお、広島市には「船舶砲兵部隊慰霊碑」を守る会の本部があるが、今次の大戦で、輸送船などの船員約六万人が戦没し、船舶二千五百隻が沈没しているといえます。したがって、船舶砲兵の人たちもたくさん戦没していますので、私もよくぞ生きて帰れたと、今でも思っています。

末期フィリピンの戦車隊で生き残る

広島県 弓井 崇弘

「弓井さんは少年戦車兵学校出身だと聞きましたが、

いつごろ入校したのですか。

十五歳の時、昭和十六年十二月一日、千葉市の戦車学校生徒隊へ第三期生徒として入校したのですが、十七年八月、今の静岡県富士宮市に陸軍少年戦車兵学校が独立しました。二、三期生の時ですから、その時が学校の歴史の始まりということです。

二年間の教育で旧制中学程度の学業を身につける。午前中だけなのできびしく教育されました。午後は兵器、無線、自動車、戦車工学です。二年生になると、午前の学業はへって午後の実科が重点となり、戦車兵の下級幹部になれる教育になる。

卒業と同時に生徒から兵長になった。一週間ぐらいの休暇の後、十一月二十七日、関東軍の戦車第一、第二師団配属者が門司に集合した。三期生の卒業者は四百九十八人で一個師団に百七十人ぐらいだった。（戦車第三師団は支那派遣軍）。

——いよいよ大陸に渡るわけですが、満州での状況を生まれてはじめて日本を離れるので、親に送られたが泣きの涙だった。かぞえ年十七歳だから。

冬の玄海灘は荒れた。釜山上陸、有蓋貨車に乗ったがその当時は国防婦人会や愛国婦人会の人たちが駅で弁当や茶の接待をしてくれた。

満州へはいつてから、第三師団要員は山海関の方へ行くので別れ、第一、第二師団はそのまま乗り換えなし、第一師団牡丹江で下車したが、我々は第二師団で、司令部のある勃利に夜中の二時半頃降りました。トタンに鼻の穴が締められるよう、臉の上下がくっ着く。はじめはわからなかったが、駅の寒暖計が零下三十二度だったので凍りついたのはじめてわかった。

師団のトラックが出迎えに来て、司令部の下士官集会所へ、建物は本格的で床のうえで仮眠、ペーチカがあって饅頭のおいしかったのを覚えている。

翌朝宮庭で、各連隊（第六、七、一〇）に配属された。第十一連隊はその時は千島へ行っていたので、三個連隊だけだった。我々第七連隊要員は二十七人で、トラックで十分ぐらいのところの岡のうえの本部に行った。前田連隊長に申告、第一中隊に四人配属となり、木下中隊長に申告、私は第三班にはいったが、第一期生や二期生が

おり、我々は豆タン（タンクー戦車）と呼ばれながら可愛がってもらった。関東軍は優秀だと聞いていたが、初年兵は使役や衛兵要員、二年兵は内務班で酒と花札。どうなっているのかと思った。

十九年の七月始めから、徹底的に戦車を分解し整備した。これはおかしいと思ったら八月一日、機甲第二師団に大動員がくだった（操縦士は車付といい、豆タンはほとんど指揮官の操縦）。戦車は九七式中戦車改、砲は四七ミリとなった。第一中隊は索敵、連絡、斥候で九五式軽戦車だった。

夜、勃利駅で無蓋貨車に戦車をのせ、人員は有蓋貨車、釜山埠頭では三日間、全員で積込作業。船は一万屯ぐらいの「利川丸」で、戦車第七連隊と機動歩兵の一部が乗船したが、船内は蚕棚のようで頭もあげられない。

―関東軍の戦車師団は、いよいよフィリピンや本土防衛のため移動し始めたわけですが、一九年後半ともなれば、潜水艦や空からの攻撃が激しくなってきたわけですか。

門司で一週間、船団待ちをし、十三隻の輸送船がそ

ろって夜出港した。我々の「利川丸」は戦車を積んでいるので三列縦隊の中央だった。夜出発だが月明りで九州の山がみえる。暑くて船内にいられぬので甲板にいた。爆発の振動がひどい、やられたと思ったら、日本の爆雷だった。敵の潜水艦がいっぱいいるからで、それ以来戦々競々しながら高雄へ入港した。

その間、水平線の方で二、三本の水柱が立って輸送船がやられている。B 29が夜間爆撃に来る。日本軍の戦闘機が体当たりをして、共に墜落したのをこの目でみました。甲板には高射砲をおいて対空射撃をした（船舶砲兵）。

高雄を出港し、なんとかバシー海峡をこえる時、フィリピンへ行くと教えられた。五時間後、フィリピン北部の海岸がみえる時、真っ白い客船が雷撃を受け岸の方へ進んでいる。船の白が目に残っているし、客船から女性（タイトピストや看護婦）が海へ飛び込んでいたがどうしても助けられない。船からは五百メートルも離れていない。

また、六千屯ぐらいの左前の船が真二つになってごう

沈した。三十分二隻沈んだが、またたくまだった。

その地帯はゲリラの巣窟だったので、岸へたどり着いても殺されたろう。敵は海の方ばかりでなく海岸からも攻めて来る。海も陸も、もう地獄だ。護衛艦も飛行機も若干いたのだが。

我々の目的地はマニラだったが、北のサンフェルナンド港へ十一隻の船が急拠はいりこんだ。戦車を降ろしたくもウインチが一台しかないで、甲板のトラックだけかろうじて降ろした（浮ドックのウインチは戦車を降ろす力が無い）。いつ艦艇や空から攻撃されるかわからない。三日間で戦車以外の糧秣・弾薬を降ろした。大休止の間、疲れて椰子の砂浜へ死んだように寝た。

翌朝、戦車隊が優先でマニラへ行って船団がくるのをマニラで待った。「利川丸」は沖で泊まっているが爆撃がいつくるかわからない。

十九年十月二十日前後（九月二十〜二十四日、米機動隊がフィリピンを大空襲して、被害甚大）、マニラ大空襲があつて船は皆やられ、帆柱だけ林立していた。私の叔父もその時船長で直撃弾をうけ遺品すらなく、礼服がも

どつたと復員後知った。

戦車を降ろす要員を昼まで待ったがウインチがやられてしまっている。しかたなく浮ドックのウインチを使って吊り揚げたが、ワイヤーが切れて第三中隊長車は沈んでしまった。ワイヤーを修理して他は降ろしたと聞いている。私の軽戦車は助かったので、エンジンを試運転したら一発でかかった。その時の嬉しさは忘れられない。

―フィリピンのルソン島も相当苦しい戦況になってくるわけですが、十月二十日にはレイテ島に米軍が上陸しているし、二十年一月にリンガエンに連合軍が上陸するのですから。

私は小隊長を乗せ宿泊地の競馬場へ帰り、戦車は外人墓地へ分散疎開した。ゲリラが弾を撃ってくるが、それより夜中の墓地のキリストやマリア像の方がこわかった。

第十連隊は大部分沈み、師団の戦車も人員も三分の二に減少してしまった。第六・七連隊はなんとか上陸したので機甲第二師団の兵力を再編成し、サンミゲルに師団司令部を置き、戦車、機動歩兵、砲兵、通信、工兵、輜

重、搜索等も分散した。

十九年十一月初旬、山下奉文将軍が第十四方面軍司令官として着任して悲壮な訓示を受けました。

「戦車は一車一台、人は一人一殺」、司令官直命で、「戦車第二師団（三個連隊）から軽戦車十五両を抽出し、北端のアパリ港の第百三師団（駿兵団）補強すべし」ということであつた。

第七連隊は第一中隊の第二小隊の三両で小隊長以下十九人（私が小隊長車を操縦）で、その晩中隊長以下ささやかなお別れのパーティーで激励され、翌朝水盃で皆に送られ出発した。二十キロぐらい北上し、十五両が集結地へ着いたのは、十時頃だったが。

第十連隊の津守大尉を長とし独立部隊となった。戦車十両に機動歩兵、装甲兵車二両、戦車整備トラック一、運搬トラック一の全車両十九両。私は第二小隊。一線縦隊で出発、毎日全員集合は夜七時頃になった。アパリの五キロ手前、ラドという小さな町で小休止した。

津守隊長車は一両だけで百三師団に申告と指示を受けるため出発し、帰ったら「別命あるまで待機」となった

ので、その間整備をしていた。

当時の戦況は、敵機動部隊が太平洋岸を遊弋中で、グラマン戦闘機二機が低空で毎朝、晩の定期便がくる。いよいよ戦闘近しと思った。

――米軍の敵前上陸近しという緊迫した状況がひしひしと感じていたことですが、その後の戦闘について話をしてください。

百三師団命令で「敵はリングエン上陸の可能性あり」ということだが、津守戦車隊は戦車道を山地へ作った。ラドと百三師団のアパリとの間は四、五キロで中間には二百メートル級の灌木林の山があった。

二、三日して出発したが、午後猛スコールにあった。道は泥濘となって戦車のキャタビラが沈んで動かない。木を切ったが五百メートルも進まない。止むを得ず野営してシートの下で寝た。つぎの日も雨は止まない。工兵隊に援助は頼めず、道具はないので木も切るのに骨折れる。

三日目の十二月二十六日、やっと晴れ、カンカン照りで泥がかわいたので、二時間からず台地までついた。

各中隊毎に分散、台地では戦車トーチカをつくるので穴ほり専門。一戦車で十五、十六個所掘った。灌木のなかでアパリの港町はすぐ下にみえるところなので敵の上陸にそなえたわけです。

その間、B 25（双発の中型爆撃機）十機ぐらいが脅かしにくる。盲爆撃でどこへ爆弾が落ちるかわからない。

戦車隊は二十年一月二十四日、連合軍のリングエン上陸を知り、敵は橋頭堡をつくって進んでくる。（敵の上陸開始は一月九日、二十四日にはルソン島クラーク西方山地の日本軍陣地へ攻撃開始、二十七日コレヒドール島部隊玉砕、二月三日米軍マニラ市内侵入）

師団命令で「津守戦車隊は原隊へ復帰すべし」とありもどった。敵の上陸で部隊は二分されマニラ、アパリへ、背後を突かれることになる。そこで、バレット峠を目指し反転、「峠で敵を攻撃せよ」と命令された。

四月十四日、十五日、制空権は敵で、グラマンに攻撃される。山地を降りラドのまちへはいったら焼夷弾爆撃で家は焼かれて住民もいない。昼は動けない、夜無灯火で行動する。私の発案で蚊取線香を車のうしろにつけ

た。それを目標に行動。十五両が夜明けと共に分散して遮蔽する。

一日に二十キロ進んだが、敵はすでに峠を越えていた。

ラドから南百キロのイラガンでは、爆撃で鉄橋が落ちていて渡れない。河の浅いところを選んで渡り終えイラガンにはいった。将校の戦車斥候を出したが、一時間もたたぬのに、砂塵をあげもどってきた。足立中尉の報告で「敵は三キロ先、M四戦車が一行縦隊で露営中」とのことであった。

イラガン国道をはさんで対陣しようとしたが、退去することとした。河には鉄橋なしなので、急拠まちの田甫道を二キロぐらいの灌木林にはいった。一本道をはさんで戦車七、八両を、二十メートルぐらい離し偽装していた。しかし、その晩敵はこなかった。

翌朝、今度は敵の偵察機が来た。戦車のキャタピラの後を目標にして五十メートルぐらい低空で我々の戦車のうえを旋回している。飛行士が指を差している。「みつかった」といったら、誰かが小銃をうった。あたったの

ではないのに、敵はエンジンを止めて滑空して筒を灯火した。紫の煙を出している。

我々は戦車の重機関銃四銃をはずして、四人で灌木林を逃げた。同年兵の長が重機が重いのでジャングルをころげこらげて、その時、双胴のロッキードP38が八機編隊でくる。さきの発煙筒の煙柱を中心にして旋回している。四人は凹地の水たまりに飛び込んだ。

P38の八機がまうえから銃撃する。赤い火、枝が落ちてくる。それから爆撃が始まった。水たまりのなかでも地響き、「もう駄目だ、戦車もやられたろう」水たまりのなかで腹もへったので凹地を出たが、重機のおき場をさがしに小一時間もかかった。

それをついで戦車に帰ったら、戦車もトラックも無傷。私の戦車はマンゴの木の下だった。枝はやられていたが爆弾のあと、二十メートルの穴があいていた。戦車は泥に埋まって泥だらけ噴火の噴煙のなかのよう。スコップでやっても駄目、戦車の天蓋をあけてはいって、動かして泥を取って中隊にもどった。

中隊長は、「お前たちが撃ったからみつかった。最後尾

「へっける」と言われた。私と長は最後尾へ二両ともはいった。中隊長は「今日は必ずM四戦車がくるから」と、国道をはさんでげいぎしようとしていた。

正午頃、斥候の庄子伍長が、五百メートル先に「M四戦車四両がくる」と報告があった。私はもうこれまででと思った。今日こそと、最後の水盃をした。三十七ミリ砲では駄目だ、軽戦車で体当たりをするよりしかたない。手榴弾三発を首に掛け、刀を抜いて拳銃を持って待った。

そのうち、敵は機関銃を撃ち放し。七十六ミリ砲弾（口径が日本の野砲より大きい）が二発はあったが不発弾で助かった。ジャングルは砲でなぎたおされている。戦車が黒くみえる。二十メートルぐらいか、エンジンをかけ向きをかえた。敵は反転したのですよ。

しかし「警戒を怠るな」ということだが、車内は灼熱地獄。満州は寒さだが、南方の方が辛かった。M四戦車四両と歩兵部隊がトラックで来るだろうから、我々はあるに出られない。そのうち、日本語で「班長殿」という。蛸壺のなかの斎藤上等兵が伝令で来て「出てみてくれ」

という。

出てみれば、友軍の戦車がやられて焼けている。私は人事係逸見准尉の図囊を預かっていたがその逸見准尉は三十分もせぬうち頭へ砲の破片があたり戦死された。

「生き残り全員集合」といったが私と長の戦車のみ残った。他の十三両は火柱を立てて燃えた。

我々は中隊長に前日「お前たちみつかったから今日は最後尾」と言われたために、私と長の戦車だけ助かったわけだ。敵が休憩中残した煙草やチョコレートを食べおいしかった。その晩は満月だった。戦車は二両を残し全滅した。地獄だった。月が鏡ならこの様子を内地へ映してくれと思った。

全中隊百九人のうち生き残りは、大門小隊長を含め二十七人だけだ。中隊長は他部隊（独立戦車隊）へ連絡に行っていたので助かった。

敵の戦車の乗員はおりてきて、日本軍の戦車のキャタピラをみてさがして撃ってくる。M四戦車の砲は口径七十六ミリ（砲身はまあ三メートルぐらいか）鉄甲焼夷弾を撃つ、装甲をかってつしてなかで焼夷する。命中すれ

ば火を発して、戦車のなかを焼けつくす。

*戦車の装甲は自分の砲の口径の弾丸までしか防げないという。日本の砲は三十七ミリだから七十六ミリでは、一発で破壊される。

敵は発電機で赤々と電灯をつけ、二キロ先でジャズをかけている。私は「戦車特攻する」といって三人ずつ乗って突込もうとしたが、中隊長は「犬死にだ」といって許可をしでくれなかった。泣く泣く自分の戦車を破壊し機関銃だけはずし、四挺を二十七人でかつぎ、弾は雑糞に入れるだけ入れて退避した。ところが、砲弾は逃げる方へ撃ってくる。どうしてかと思ったらコードがある。斎藤上等兵がそれを切ったら、木の枝にマイクが点々と置いてある。ここまでやっているのか、これでは負けた。と思った。

四挺の機関銃を持って逃げ、カガヤン河のところまで来た。足立中尉が完全軍装のまま渡河点をさがしに行った。カガヤン河の支流（幅五十メートル）で足立中尉は急流に流された。「皆ついてきてはいかんぞ」の声が最後だった。

我々はその夜、竹藪にひそんで、翌朝上流五十メートルのところで渡ることができた。

津守戦車隊は、さきほど申しした二十年六月二十日イランで全滅し、今は津守独立機関銃隊となったわけだ。そこで、北部ルソンのシレラマドレ山脈系の山地を横断突破して太平洋岸へ出ようとした。六十キロぐらいと思われた。しかし、地図も磁石もない。雑糞にいれられるだけ唐もろこしをいれた。

結果的には六月二十二日で、海拔一千メートルの山を越え、海岸にたどり着いたのが九月十五、十六日で、約三か月間山をはいかいたことになりました。もちろん食物はない。おとおかげを撃って焼いたり、川の目を生で食べたり、私はマラリアと栄養失調症で、死ぬ寸前でしたが、同期生で生き残った長の死に水を取った。

イラガンの生き残り、二十七人中半数が山中で死んだ。拳銃で自殺した者もいた。津守大尉も死んだ。第二小隊長の大門中尉以下が、バラナン湾にたどり着くことが出来た。

食べ物の話をまたするけれど、糧秣も、椰子も無い。

歩兵が先に行くのであとはなにもない。ジャングルのなかで砂糖黍畑を発見したことがある。私はゴボー剣（短剣）で切って、なんぼ食ったかわからない。それで命拾いをした。それから皆を呼んだら喜んだこと。生きたミイラ同然の体、腹だけは水ぶくれ、お蔭で気分だけは元気になった。

二十年九月二十日から二十七日頃だった。青い米国の水上機が飛んできた。敵だと思った（終戦を知らないから）、飛行機が海岸線から十メートルぐらいのところに着水した。参謀肩章をつけ軍刀をさげた将校が降りて、水のなかを歩いてくる。米軍将校もつづいて降りて来た。

ここ一か月ばかり米軍の飛行機がとんでこないの、
「アメリカが負けたのか」とも思った。バラマン湾には日本軍が一千二百五十人いたが、ミイラの兵隊ばかりだった。その参謀が「日本軍は出てこい」という。集まると、終戦の詔勅を読んだ。泣く者、喜ぶ者、歩兵の大隊長が指揮官になった。

つぎの日から米軍給与になった。ダグラス機二機が食糧の木の梱包を無数に落としてくれたが爆弾かも知れな

い。近寄らず、息を殺して見ていたが、何分たっても爆発しない。英語のわかる将校がいつて箱をみたら、箱は食糧であった。

一千二百五十人の食糧が、朝、昼、夜と梱包の色が違う。数は一人分も違わない。それから毎日、毎日一千二百五十人はアメリカ給与。食糧をおとす落下傘がテントになった。

一週間後、上陸用舟艇がはいってきた。十月十日頃だったと思う。サンフェルナンド港から米軍に収容されたが、フィリピン人が「日本バカヤロー、泥棒」などと叫んでいる。船から降りられない。植民地を解放したのだが、戦場となった国民には迷惑をかけたことになる。正直、当時複雑な気持で、現地人の罵声を聞きながら、日本内地の状況や、将来への不安を抱きながら、戦友の骨が埋められている戦場をあとにした。

米軍の収容所から船に乗ったのは、二十一年十二月十二日で、十二月十八日名古屋へ上陸し復員した。階級は軍曹から曹長になり、手当約九百円もらった。それで三か月しのいだ。